



[原著]

看護学生の生活体験と看護学生が抱く療養者の手段的日常生活行動イメージ

楳田 恵子¹⁾、篠崎恵美子²⁾

1) 岐阜保健大学看護学部、2) 人間環境大学大学院看護研究科

要旨

【目的】看護系大学3年生から生活体験と、療養者の手段的日常生活行動イメージの調査し、手段的日常生活行動イメージに影響する生活体験を明らかにする。

【方法】在宅看護論実習前の学生196名を対象に自己記入式アンケート調査を行った。

分析方法は、学生の生活体験が学生の抱く療養者の手段的日常生活行動イメージに影響しているかを解析する目的で重回帰分析を行った。重回帰分析を行う前に質問項目が多いために因子分析と重回帰分析を統合した構造方程式モデリング (structural equation modeling :SEM) で実施した。

【結果】学生の生活体験は、自分の部屋掃除104名(99.0%)、食事を作るための買い物・食事の後片付け103名(98.1%)の項目が多く、子供・病人の世話65名(61.9%)、ボランティア活動・地域交流70名(66.7%)、自宅のトイレ掃除77名(73.3%)の項目が少なかった。学生が抱く療養者の行動イメージは、冷暖房機器の操作、乗り物に乗っての移動の項目が多く、年金・預金の管理、集金の対応、洗濯のイメージの項目が少なかった。療養者の手段的日常生活行動イメージに影響する学生の生活体験は、他者との交流体験であった。

【結語】学生の生活体験で他者との交流体験因子である「他人の家への訪問」「銭湯」「見知らぬ高齢者との会話」「ボランティア活動・地域交流」「子供・病人の世話」が学生の抱く療養者の手段的日常生活行動イメージに影響していた。

キーワード：療養者、手段的日常生活行動イメージ、看護学生、生活体験

1. はじめに

令和4年(2022)保健師助産師看護師学校養成所指定規則改正(第5次)において、在宅看護論は「地域・在宅看護論」への名称変更や、看護の対象を「療養者」から「生活する人」へと変更される。さらに、単位数の増加やカリキュラムの位置づけが基礎看護学の次に改正される¹⁾。この改正は、生産年齢人口減少の背景とし、地域包括ケアシステム

を担う看護師の養成を目的としたもので、看護学生(以後学生と略す)に対して、地域で暮らす療養者の「生活を理解する」必要性が強化される。

療養者の生活を理解することは、生活を知ることである。池西は、生活を日常生活行動(daily life behavior)(以後dl行動と略す)など、日々の営みを主としたものであると述べている²⁾。野並は、自分自身の生活体験と療

楳田 恵子
〒500-8281 岐阜県岐阜市東鶉2丁目92
岐阜保健大学看護学部

2022年2月2日受付
2022年3月15日受理

E-mail: dn17002@uhe.ac.jp,
k-umeda@gifuhoken.ac.jp

養者の dl 行動がつながることで、療養者の生活を捉え理解することができる」と報告している³⁾。確かに、看護師は、それぞれの生活体験で自分なりの概念を組み込んでいくことで生活を理解することを可能にしている⁴⁾。しかし、学生は生活体験の乏しさや、看護教育において在宅療養環境と療養者の dl 行動を関連させて看護実践を学ぶ機会が少ないと指摘されている^{5,6)}。そのため、学生自身の生活体験からは、療養者の dl 行動をイメージするのが難しいと考えられる。学生は、疾患と障害を待った療養者の生活を支える看護を学ぶにあたり、療養者の dl 行動の情報を得ることで、療養者が暮らしていくためには何が足りなく、どのように支援するのかを考える必要があるため、学生が療養者の dl 行動イメージをもつことは、看護を展開するために重要である。

先行研究では、「生活を理解する」ために、在宅看護論実習準備段階において、視聴覚教材、ロールプレイなど様々な視点から取り組みがなされている。この取り組みにより、訪問看護に必要な態度や礼節・マナー・療養者・家族とのコミュニケーション能力などで効果が報告されている^{7,8,9,10)}。しかし、吾郷らは、在宅で暮らす療養者である高齢者や障がい者の生活を学ぶ機会が少ないために、学生は「療養者の生活」イメージを持つことが難しいと述べている¹¹⁾。これらのことから、学生は地域で暮らしている療養者と接する機会も少なく、自身の生活を結び付けて療養者の生活のイメージを抱くことは困難だと考えられる。しかしながら、学生の療養者の dl 行動イメージに、影響する生活体験があるのではないかと考えた。それを明らかにすることで、足りない生活体験を補い、療養者の生活イメージを抱くことができると考えられる。先行研究では、佐々木らによる「学生の生活行動と生活体験の特徴を明らかにした」¹²⁾ものはあるものの、学生の生活体験と学生が抱く療養者のイメージに関する研究は見当たらなかった。

そこで本研究では、学生が抱く療養者の dl 行動イメージ調査を行った。dl 行動には手段的日常生活行動（以後 IADL 行動）と日常生活動作（ADL）があるが、実際の社会生活

に必要な社会的適応という視点で IADL 行動イメージを把握することにした。IADL 行動は、複雑で高次の生活行動であることから身体機能や認知機能・精神機能といった様々な機能が必要になり、地域社会の中で自立した生活を営むためには重要な能力である。また、高齢者の IADL 行動の変化は、基本的日常動作に先行して生じ、生命予後と関連するとされている¹³⁾。訪問看護師は、24 時間療養者のそばにいて状態を観察するができないため、療養者のわずかな変化に対して予後予測を行う。予測をするためには、療養者の IADL 行動の知識は大切なものであり、在宅看護論を学ぶ学生には重要な情報であると考えたからである。

学生の生活体験と学生が抱く療養者の IADL 行動イメージを調査し、IADL 行動イメージに影響を与える生活体験を明らかにすることで、地域で暮らす療養者の「生活を理解する」ための授業を検討する基礎的資料になると考えた。

II. 目的

在宅看護論実習前の看護系大学 3 年生から生活体験と、学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ調査をし、IADL 行動イメージに影響を与える生活体験を明らかにする。

III. 研究方法

1. 調査方法・調査対象

東海地方の看護系大学（2 校）3 年生で在宅看護論実習前の学生 196 名を対象に自己記入式アンケート調査を行った。調査期間は、2020 年 1 月から 3 月に実施した。

2. 調査内容

先行研究^{14,15,16)}をもとに、調査項目を選定し、学生の性別、同居状況と生活体験 14 項目の有無を求めた。療養者の IADL 行動イメージ項目は、生活関連行動として老研式活動能力指標「手段的自立」尺度と Lawton の手段的 ADL 評価尺度¹⁷⁾の 16 項目とし、在宅看護論実習前に、学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ程度をリッカートスケール（4 件法）で回答を求めた（表 1）。

3. 分析方法

基本属性と学生の生活体験は記述統計を行

った。療養者の IADL 行動イメージ項目は、イメージ程度を 4 択回答で得たものを「全くできない」0 点、「少しはできる」1 点、「できる」2 点、「大変できる」3 点の間隔尺度とみなし平均値を求めた。

療養者の IADL 行動イメージに学生の生活体験が影響しているかを解析する目的で、重回帰分析を行った。重回帰分析を行う前に質問項目が学生の生活経験 14 項目、療養者の IADL 行動イメージ 16 項目と多いために共通因子を探るために因子分析した。因子分析と重回帰分析を統合した構造方程式モデリング (structural equation modeling :SEM) で実施した。

因子分析は、項目を最尤法、プロマックス斜交回転による因子分析を行った。因子数の決定は、カイザーガットマン基準に従って固有値 1.0 以上となる因子まで求めた。適合度の評価には KMO 測度、バレットの球面性検定を参考とした。有意水準は $p = 0.05$ とした。

重回帰分析は、強制投入法を用いて分析を行った。IADL 行動イメージ項目はシャピロ・ウィルク検定にて正規性を確認した。各変数は因子係数を使い、多重共線性、VIF、分散分析 (ANOVA) の検定結果、各独立変数の有意性、標準偏回帰係数、決定係数、自由度調整済み決定係数の確認を行った。

統計解析のために、SPSS ver26.0 for Windows(IBM)を用いた。

4.研究における倫理的配慮

学生のアンケート調査は、各大学の看護学部長に、学生への研究実施についての承諾をもらい実施した。アンケート前には、研究の目的や無記名であること、研究協力の可否は大学の成績などに影響しないこと等を伝えた。アンケート用紙の回収をもって研究協力の同意とした。本研究で得られた結果は統計的に処理し個人が特定できないものとした。本研究は A 大学研究倫理審査会で承認された (許可番号:2019N-014,2019.12 月)。

表1. 看護学生の生活体験と看護学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ質問項目

生活体験 (14項目)		療養者の IADL イメージ (16項目)	
1	他人の家に訪問	1	自分で電話を掛けたり、受ける
2	ボランティア活動・地域での交流会	2	乗り物に乗って移動する
3	アルバイト経験	3	戸締り、留守番、火や水の管理
4	子どもの世話・病人の世話	4	年金、貯金の管理、集金の対応等
5	銭湯での入浴	5	機器 (冷暖房) の操作等
6	見知らぬ高齢者との会話	6	薬カレンダーを利用
7	自室の掃除	7	寝具の整頓
8	自宅のトイレ掃除	8	部屋の清掃
9	自宅の風呂掃除	9	材料を調達する
10	食事を作るための買い物	10	調理をする
11	手作り料理	11	材料の後始末
12	食事の後片付け	12	配膳
13	自宅のゴミ出し	13	食器などの後片付け
14	自分で洗濯をして干して片づけする	14	洗濯物を洗う
		15	洗濯物を干す
		16	洗濯物をたたむ

IV. 結果

学生 196 名に配布し、回収は 108 名 (回収率 55.1 %)、有効回答は 105 名 (97.2 %) であった。

1. 学生の同居状況と生活体験の実態

学生は、男性 24 名 (22.9 %)、女性 81 名 (77.1 %) で、学生の同居状況は、一人暮らし 7 名 (6.7 %)、祖父母と同居 9 名 (8.6 %) であった。

学生の生活体験は、自分の部屋掃除 104 名 (99.0 %)、食事を作るための買い物・食事の後片付け 103 名 (98.1 %) が多く、子供・病人の世話 65 名 (61.9 %)、ボランティア活動・地域交流 70 名 (66.7 %)、自宅のトイレ掃除 77 名 (73.3 %) が 90 % 以下であった (表 2)。

2. 学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ

在宅看護論実習前の学生が抱く療養者の IADL 行動イメージが高い項目は、「冷暖房機器の操作ができる」 1.58 ± 0.81 点、「乗り物に乗って移動することができる」 1.51 ± 0.93 点、「電話を掛ける、受け取る」 1.50 ± 0.80 点であった。イメージが低い項目は、「年金・預金の管理、集金の対応ができる」 1.18 ± 0.74 点、「洗濯ができる」 1.26 ± 0.75 点、「調理の材料が調達することができる」 1.28 ± 0.80 点であった (表 3)。

3. 在宅療養者の IADL 行動イメージ想起に影響している学生の生活体験項目の抽出

IADL 行動イメージに影響している学生の生活体験は何かを探るために、重回帰分析を行った。分析を行う前に、質問項目である生活体験 14 項目、療養者の IADL 行動イメージ 16 項目の共通因子を探るために因子分析を行った。

学生の生活体験 14 項目のデータを最尤法、プロマックス斜交回転で行った。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度 0.62、Bartlett の球面性検定の有意確立 $P < 0.01$ 、カイザーガットマン基準に従って 4 因子が抽出された。各因子は、「日々の生活に関する家事経験」(4 項目)「生活の自立に向けた経験」(3 項目)「家族の一員として行う役割経験」(2 項目)「他者との交流体験」(5 項目)と命名した (表 4-1)。

IADL 行動イメージ 16 項目を最尤法、プ

ロマックス斜交回転で行った。Kaiser-Meyer-Olkin の標本妥当性の測度 0.62、Bartlett の球面性検定の有意確立 $P < 0.00$ 、カイザーガットマン基準に従って 3 因子が抽出された。「生活を向上させる行動」(8 項目)「食事の支度行動」(6 項目)「洗濯行動」(3 項目)と命名した (表 4-2)。

療養者の IADL 行動イメージ (従属変数) 3 因子に、学生の生活体験 (独立変数) 4 因子の影響力を確認する目的で、強制投入法を用いて重回帰分析を行った。

生活を向上させる行動は、「他者との交流体験」($\beta = 0.36$, $p < 0.05$) のみ採択され、「日々の生活に関する家事経験」($\beta = -0.14$)、「生活の自立に向けた経験」($\beta = -0.16$)、「家族の一員として行う役割経験」($\beta = -0.03$) は採択されなかった。これらの決定係数は $R^2 = 0.11$ であった。

食事の支度行動は、「他者との交流体験」($\beta = 0.29$, $p < 0.05$)、「生活の自立に向けた経験」($\beta = -0.31$, $p < 0.05$) が採択された。「日々の生活に関する家事経験」($\beta = -0.09$)、「家族の一員として行う役割経験」($\beta = -0.03$) については採択されなかった。決定係数は $R^2 = 0.12$ であった。

洗濯行動は、「他者との交流体験」($\beta = 0.25$, $p < 0.05$)、「生活の自立に向けた経験」($\beta = -0.31$, $p < 0.05$) が採択された。「日々の生活に関する家事経験」($\beta = -0.21$)、「家族の一員として行う役割経験」($\beta = 0.11$)、については採択されなかった。決定係数は $R^2 = 0.12$ であった (表 5)。

V. 考察

学生の生活体験と学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ影響している生活体験を明らかにするために (1) 学生の生活体験、(2) 学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ、(3) 学生が抱く療養者の IADL 行動イメージに影響する学生の生活体験を明らかにした。その結果から、学生の生活体験と、学生が抱く療養者の IADL 行動イメージの関係と学生の生活体験などを補う授業資料とするために考察した。

1. 学生の同居状況と生活体験の程度

医学と生物学 (Medicine and Biology)

表2. 看護学生の生活体験

項目	N=105	
	あり 人数 (%)	なし 人数 (%)
自室の掃除	104 (99.0)	1 (1.0)
食事を作るために買い物	103 (98.1)	2 (1.9)
食事の後片付け	103 (98.1)	2 (1.9)
手作り料理	100 (95.2)	5 (4.8)
アルバイト	98 (93.3)	7 (6.7)
自分の洗濯をしてほし片付ける	96 (91.4)	9 (8.6)
自宅のゴミ出し	95 (90.5)	10 (9.5)
自宅の風呂掃除	92 (87.6)	13 (12.4)
見知らぬ高齢者との会話	88 (83.8)	17 (16.2)
他人の家に訪問	84 (80.0)	21 (20.0)
銭湯での入浴	78 (74.3)	27 (25.7)
自宅のトイレ掃除	77 (73.3)	28 (26.7)
ボランティア活動・地域の交流	70 (66.7)	35 (33.3)
子ども・病人の世話	65 (61.9)	40 (38.1)

表3. 看護学生が抱く療養者のIADL行動イメージの程度

項目	N=105				平均値	標準偏差
	全くできない 人数 (%)	少しはできる 人数 (%)	できる 人数 (%)	大変できる 人数 (%)		
冷暖房機器の操作ができる	6 (5.7)	47 (44.8)	37 (35.2)	15 (14.3)	1.58	0.81
乗り物 (バス・電車・自家用車) に乗って移動することができる	12 (11.4)	47 (44.8)	26 (24.8)	20 (19.0)	1.51	0.93
自分で電話を掛ける、受けとることができる	8 (7.6)	49 (46.7)	36 (34.3)	12 (11.4)	1.50	0.80
食事の後片付けができる	7 (6.7)	49 (46.7)	39 (37.1)	10 (9.5)	1.50	0.76
戸締り、留守番、火や水の管理することができる	10 (9.5)	50 (47.6)	32 (30.5)	13 (12.4)	1.46	0.83
薬カレンダーなど利用して薬を管理することができる	10 (9.5)	52 (49.5)	30 (28.6)	13 (12.4)	1.44	0.83
食事前の配膳ができる	9 (8.6)	53 (50.5)	32 (30.5)	11 (10.5)	1.43	0.79
療養者自身の寝具の整頓ができる	12 (11.4)	52 (49.5)	29 (27.6)	12 (11.4)	1.39	0.84
調理を (自分・家族) ができる	10 (9.5)	55 (52.4)	30 (28.6)	10 (9.5)	1.38	0.79
材料の後始末ができる	11 (10.5)	54 (51.4)	31 (29.5)	9 (8.6)	1.36	0.79
物干しに洗濯物を干すことができる	7 (6.7)	61 (58.1)	31 (29.5)	6 (5.7)	1.34	0.69
療養者が部屋の清掃ができる	14 (13.3)	52 (49.5)	29 (27.6)	10 (9.5)	1.33	0.83
洗濯物をたたみタンスに片づけができる	11 (10.5)	57 (54.3)	30 (28.6)	7 (6.7)	1.31	0.75
調理の材料を調達する (買い物) ができる	14 (13.3)	57 (54.3)	25 (23.8)	9 (8.6)	1.28	0.80
洗濯ができる (洗濯機を使用している)	14 (13.3)	55 (52.4)	31 (29.5)	8 (7.6)	1.26	0.75
年金、貯金の管理、集金の対応ができる	16 (15.2)	59 (56.2)	25 (23.8)	5 (4.8)	1.18	0.74

表4-1. 看護学生の生活体験に関する質問項目の構造

	因子負荷量			
	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV
因子 I : 日々の生活に関する家事経験				
食事を作るために買い物をしたことがあるか	0.93	-0.02	0.24	0.21
手作り料理をしたことがあるか	0.69	-0.06	0.37	0.40
自宅のゴミ出しをしたことがあるか	0.53	0.13	0.51	0.21
自分で洗濯をして干し片づける	0.50	0.15	0.37	0.03
因子 II : 生活の自立に向けた経験				
食事の後片付けをしたことがあるか	0.03	0.92	0.30	0.18
自室の掃除	0.00	0.79	0.03	0.26
アルバイト経験	0.26	0.32	0.05	0.27
因子 III : 家族の一員として行う役割経験				
自宅の風呂掃除	0.29	0.06	0.84	0.20
自宅のトイレ掃除	0.32	0.19	0.64	0.26
因子 IV : 他者との交流体験				
他人の家の訪問経験	0.17	0.15	0.05	0.55
銭湯経験	0.15	0.23	0.26	0.49
見知らぬ高齢者との会話	0.39	-0.08	0.22	0.47
ボランティア活動・地域の交流	-0.06	0.19	0.09	0.41
子ども・病人の世話経験	0.22	0.17	0.25	0.37
因子間相関	I	II	III	IV
I	1.00	0.01	0.38	0.33
II		1.00	0.18	0.20
III			1.00	0.26
IV				1.00

表4-2. 療養者のIADL行動イメージ質問項目の構造

	因子負荷量		
	因子 I	因子 II	因子 III
因子 I : 生活を向上させる行動			
年金、貯金の管理、集金の対応ができる	0.89	-0.22	0.09
戸締り、留守番、火や水の管理することができる	0.77	0.07	0.08
乗り物 (バス・電車・自家用車) に乗って移動することができる	0.74	0.03	0.12
自分で電話を掛ける、受けとることができる	0.74	0.13	-0.15
療養者自身の寝具の整頓ができる	0.55	0.35	-0.02
冷暖房機器の操作ができる	0.54	0.32	-0.04
薬カレンダーなど利用して薬を管理することができる	0.53	0.15	0.04
療養者が部屋の清掃ができる	0.40	0.44	0.09
因子 II : 食事の支度行動			
食事前の配膳ができる	-0.06	0.97	0.05
材料の後始末ができる	0.07	0.82	0.04
調理を (自分・家族) ができる	0.06	0.78	0.02
食事の後片付けができる	0.01	0.70	0.24
調理の材料を調達する (買い物) ができる	0.27	0.53	0.12
因子 III : 洗濯行動			
洗濯ができる (洗濯機を使用している)	0.00	0.00	0.89
洗濯物をたたみタンスに片づけができる	0.11	0.02	0.82
物干しに洗濯物を干すことができる	-0.06	0.18	0.81
因子間相関	I	II	III
I	1.00	0.79	0.70
II		1.00	0.77
III			1.00

因子抽出法: 最尤法
回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

因子抽出法: 最尤法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

表5. 看護学生の生活体験による学生が抱く療養者のIADL行動イメージの影響

	療養者の手段的日常生活行動イメージ		
	生活を向上させる行動	食事の支度行動	洗濯行動
	標準化係数	標準化係数	標準化係数
	β	β	β
日々の生活に関する家事経験	-0.14	-0.09	-0.21
生活の自立に向けた経験	-0.16	-0.31**	-0.31**
家族の一員として行う役割経験	-0.03	-0.03	0.11
他者との交流体験	0.36***	0.29**	0.25*
F値	3.00*	3.48**	3.42**
R ²	0.11	0.12	0.12
調整済みR ²	0.07	0.09	0.09

*p < 0.5 **p < 0.01***p < 0.001

学生の同居家族は、親との同居 91.4 %、祖父母との同居は 8.6 % であり、高齢者白書での 3 世代同居率 11.0 %¹⁸⁾ と似通っており、現代の学生の社会的背景を映し出していた。

学生の生活体験は、家事経験は高く、子供・病人の世話、ボランティア活動・地域交流会などの人との交流体験は全体的に低い。対象学生の生活体験は、先行研究の結果と同様であった^{19,20,21,22)}。生活体験が乏しかったのは、子供の世話やボランティア活動・地域交流、他人の家への訪問項目であった。これは、学生が育った環境が、同世代の集団遊びの減少、地域社会との隔離などといった社会の変化により、積極的に求めなければ、直接的な人との触れ合いが得られない時代となっていたことに関係している。そのために、坂本らは、世代間・地域交流がない学生は、対象者の生活している文化・環境や価値観が大きく異なることで、疾患や障害がある高齢者が、在宅でどのように生活しているかを想像することは困難であると述べている²³⁾。

学生の家事経験は、食事に関連する買い物、調理、後片付け、洗濯などは 90 % 以上経験していた。高井らが行った調査においても、学生の 80.0 % は自室の掃除、食後の後片付けをしており、生活経験が乏しいのはトイレ・風呂など共同で使用する場の掃除であった²⁴⁾。赤塚らの大学生を対象とした家事調査でも、大学生がトイレ掃除を行っているのは 23 % と報告されており²⁵⁾、本研究結果 (26.7 %) と同じであった。トイレ掃除経験が低いのは、本研究の対象者の同居率

(93.3 %) が高く、同居者家族がトイレ掃除を担っているため、自分で行う必要性がないことが推察された。

これらのことより、本研究対象の学生は、人との交流体験が乏しいことにより、在宅での療養者の生活イメージを持つことは難しいが、学生の家事経験は高く、生活するために必要な行動を漠然と理解していることが予測された。

2. 学生が抱く療養者の IADL 行動イメージについて

学生が抱く在宅療養者の IADL 行動イメージで低い項目は、年金・預金の管理の家計管理、洗濯などの家政、調理の材料が調達するという食事の支度であった。学生は、療養者と病院にいる患者は同じ行動しかできず、病院のままの状態では自宅の部屋にいると想像しているという報告があるように²⁶⁾、本研究対象の学生も、「病院の患者イメージ」の枠から逸脱することなく、在宅で暮らしている療養者も同様にこの状態で過ごしていると推測される。また、イメージを抱くことができない行動は、家計管理・家政・食事の支度の項目であり、病院や施設では患者が直接行うことが少ない行動である。対象の学生は、基礎看護学実習において病院実習を経験しているが、患者が実際に、お金の支払い、食事の準備や洗濯をしている行動を見ることは少ない。さらに、学生たちの生活においても、家族と同居している学生が多いために、自ら主体的に家計管理、家政など行う必要性が少ないのではないかと考えられる。この 2 点から、疾患や障害を持っている療養者がその行動をしているイメージを想起するのは困難であることが考えられる。

3. 学生の生活体験と学生が抱く療養者の IADL 行動イメージの関係

学生の生活体験 4 因子のうち学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ 3 因子全部に「他者との交流体験」が影響していた。他者との交流体験因子は、「他人の家への訪問」「銭湯」「見知らぬ高齢者との会話」「ボランティア活動・地域での交流」「子供・病人の世

話」であった。この5項目は人との交流体験であり、他の生活体験より低い項目であった。この項目を補うことにより、学生の療養者の IADL 行動イメージを高めることにつながると考えられる。人は、世代間・地域交流により、高齢者や地域住民から生活形式や人の中で生きて作用している価値や規範を学び²⁷⁾、地域社会や人の関心の視野が広がるとされている²⁸⁾。学生は、人との交流体験を通して、療養者の生活様式や価値や規範を学ぶ。そのことで、学生は、療養者の IADL 行動イメージは自身の生活行動と別なものでなく、自分自身の生活体験から導かれ「療養者」の生活を捉える機会になると考えられる。学生の生活体験と学生が抱く療養者の IADL 行動イメージを結びつけるのは、人との交流体験である可能性が示唆された。

また、学生には、地域に出向き、暮らしを肌で感じ、一緒に食事をするなどの体験学習がいいとされている²⁹⁾。小山は、体験学習に「ふれあいサロン」への参加が地域で暮らす人を知る機会になるとを報告している³⁰⁾。学生が、「療養者の生活を捉え理解する」ためには、地域の人たちとの交流体験による体験学習が、学生の生活体験を補い、療養者の IADL 行動イメージを持つことができるのではないかと考えられる。

VI. 研究の限界と今後の発展

本研究では、対象が東海地域の2校と限られており、本結果を一般化することに限界がある。また、調査項目について先行研究をもとに抽出したが、尺度の妥当性という点で限界がある。しかしながら、学生の療養者の生活イメージを明らかにし、療養者の生活を捉えることが可能となる教育を検討することは重要であるため、一つの資料となりうるのではないかと考えられる。

VII. 結語

在宅看護論実習前の学生の生活体験と、学生が抱く療養者の IADL 行動イメージ程度を調査した結果、IADL 行動イメージに影響を与える生活体験は以下のとおりである。

(1) 学生の生活体験は、自分の部屋掃除 104 名 (99.0 %)、食事を作るための買い

物・食事の後片付け 103 名 (98.1 %) の項目が多く、子供・病人の世話 65 名 (61.9 %)、ボランティア活動・地域交流 70 名 (66.7 %)、自宅のトイレ掃除 77 名 (73.3 %) の項目が少なかった。

(2) 学生が抱く療養者の IADL 行動イメージは、冷暖房機器の操作、乗り物に乗っての移動の項目が多く、年金・預金の管理、集金の対応、洗濯のイメージの項目が少なかった。

(3) 療養者の IADL 行動イメージに影響する学生の生活体験は、他者との交流体験であった。

学生の生活体験で他者との交流体験因子である、「他人の家への訪問」、「銭湯」、「見知らぬ高齢者との会話」、「ボランティア活動・地域交流」、「子供・病人の世話」が学生の抱く療養者の IADL 行動イメージに影響していた。

謝辞

本研究にご協力くださった看護学生の皆様に感謝申し上げます。

利益相反：本研究における利益相反はありません。

引用文献

- (1) 厚生労働省:看護基礎教育検討会報告書令和元年 10 月. (2020 年 6 月 5 日参照)
- (2) 池西静江.指定規則改定で強化が求められる「地域・在宅看護論」.看護教育.2020,61(7)p.548-555.
- (3) 野並葉子.看護において生活をどう捉えるか--解釈的現象学による生活習慣病者の病気の体験から.看護研究.2006,39(5),p.409-414.
- (4) 川越博美,棚橋さつき,佐々木静枝,他.地域拠点としての「大学」と「ステーション」「訪問看護師」をどう育むか?基礎教育・現任教育の両側面から.訪問看護と介護.2012,17(5),p.380-389.
- (5) 吾郷ゆかり,吉川洋子,松本玄智江,ほか.看護基礎教育における「生活者を理解する視点」-家庭訪問実習と病院実習後の自己

- 評価より-。島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要.2009,3,p.77-83.
- (6) 柏木聖代,川村佐和子,原口道子.看護基礎教育における在宅看護学実習の現状と課題;訪問看護ステーションへのインタビュー調査から.日本在宅看護学会誌.2015,3(2),p.44-54.
- (7) 阿川啓子,吾郷ゆかり,落合のり子,ほか.在宅療養環境をアセスメントするための視聴覚教材の創作とその教育効果.島根県立大学出雲キャンパス紀要.2014,9,p.29-36.
- (8) 及川理恵,十枝初重.パフォーマンス課題を取り入れた演習が在宅看護論実習に及ぼす効果.日本看護学会論文集在宅看護.2019,49,p.71-74.
- (9) 山崎律子,波止千恵,新開博.医療機器を使用した在宅看護論演習の成果 酸素濃縮器と人工呼吸器を使用した体験型演習での学びを通して.純真学園大学雑誌.2018,7,p.55-62.
- (10) 内藤恭子,御田村相模.実習前の学内演習が在宅看護技術経験に与える効果 在宅看護に特徴的な看護技術の経年変化から.日本看護学会論文集看護教育.2016,46,p.31-34.
- (11) 吾郷ゆかり,祝原あゆみ,栗谷とし子.在宅看護実習の学びの構成.島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要.2011,5,p.101-109.
- (12) 佐々木彩加,小原泉,鹿野浩子,ほか.看護学生の生活行動と生活体験の特徴からみた教育方針.自治医科大学看護学ジャーナル.2019,17,p.3-8.
- (13) 新開省二.高齢者の生活機能の予知因子.日本老年医学会雑誌.2001,38(6),p.747-750.
- (14) 川田智美,木村由美子,木暮深雪,ほか.看護教員が学生の生活体験の乏しさを感じた実習場面.群馬保健学紀要.2005,26,p.133-140.
- (15) 玉木敦子.今どきの看護学生をどう育てるか.神戸女子大学看護学部紀要.2017,2,p.1-10.
- (16) 千葉敦子,細川満子,山本春江,ほか.在宅看護実習前に学生に身につけさせたい実習態-訪問看護ステーション実習指導者に対するアンケート調査-.青森保健大雑誌.2010,11,p.61-66.
- (17) 古谷野亘,柴田博,中里克治,ほか.地域老人における活動能力の測定-老研式活動能力指標の開発-.日本公衆衛誌.1987,34,p.109-114.
- (18) 内閣府.平成29年度高齢化の状況及び高齢社会対策の実施状況.(2020年10月5日参照)
- (19) 竹口和江,中尾八重子,山谷真由美,ほか.在宅看護実習の充実にむけた生の学びの検討-学生が捉える「生活者としての療養者」の特徴.長崎県立大学看護栄養学部紀要.2021,19,p.11-20.
- (20) 鈴木育子,石津仁奈子,佐藤正子.統合分野における在宅看護論教授法と実習指導の課題と方向性-過去6年間の在宅看護論に関する文献検討-.足利大学研究集録看護研究紀要.2016,3(1),p.27-35.
- (21) 小野恵子,小笠原映子.在宅看護学教育演習プログラム評価.日本地域看護学会誌.2015,17(3),p.30-40.
- (22) 三尾弘子,林さえ子,福田博美,ほか.看護のシミュレーション教育のロールプレイに関する文献検討-論文タイトルのテキストマイニングを用いた分析-.中部学院大学・中部学院大学短期大学部教育実践研究.2017,3(1),p.215-222.
- (23) 坂本弘子,福森利智子,木村紀美.看護学生の社会的スキル獲得状況に関する生活体験および自我状態.八戸学院大学紀要.2018,57,P.185-193.
- (24) 高井奈津子,茶碗谷草子,前垣綾子,ほか.看護学生の日常生活体験の実態調査.北海道文教大学研究紀要.2010,34,p.103-111.
- (25) 赤塚朋子,渡邊菜都.美小学校家庭科と家事.宇都宮大学教育実践紀要.2018,5,p.201-208.
- (26) 橋本茜,作山美智子.在宅看護論実習の展開と学生の学び.東北文化学園大学看護学科紀要.2015,4(1),p.81-89.
- (27) 原由美子,波止千恵,梅崎節子,ほか.地域の高齢者と大学生による異世代間交流.純真学園雑誌.2018,7,p.9-13.

医学と生物学 (Medicine and Biology)

- (28) 権滋珠,岸本美紀,沖田勝美,ほか.地域での世代間交流活動の参加経験が保育士を
目指大学生の認識に及ぼす影響-本学学生による「笑話浪漫サロン」の実施を通して-.
岡崎女子大学・岡崎女子短期大学地域協働研究.2018,4, p.39-48.
- (29) 中井俊樹.看護教育実践シリーズ 5 体験学習の展開.4-10,医学書院.2019,東京.
- (30) 小山陽子.地域での実習の工夫と調整.看護教育.2020,61(7), p.564-570.

The Life Experiences of a Nursing Student, and the Image Held by Nursing Students about the Instrumental Activities of Daily Living (IADL) of a Patient

Keiko Umeda ¹⁾, Emiko Shinozaki ²⁾

1) Gifu University of Health Sciences, School of Nursing,

2) University of Human Environments, Graduate School of Nursing

Summary

[Purpose] Survey the life experiences of 3rd year nursing university students, as well as their image of the IADL of patients, in order to clarify their relationship.

[Method] Conducted self-entry questionnaires targeting 196 students (pre-training) in the field of Home Care Nursing theory.

For the analysis method, multiple regression analysis was conducted for the purpose of analyzing whether or not the life experiences of students affected the student's image of the IADL of patients. Since there were numerous question items, before conducting the multiple regression analysis, it was implemented with a structural equation modeling (SEM) that integrated factor analysis and multiple regression analysis.

[Result] The result indicates a certain number of responses on items like cleaning their rooms with 104 students (99.0%), and shopping for cooking and clean-up after dining with 103 students (98.1%) regarding the life experiences of students. On the other hand, there were fewer responses on items pertaining to taking care of children and the sick with 65 students (61.9%), volunteer activity and interactions with the local community with 70 students (66.7%) and cleaning the toilet at home with 77 students (73.3%). The image held by students about the IADL of patients were mostly items pertaining to operating the air conditioner and transportation onboard a vehicle, while there were few items pertaining to images of managing pensions and bank accounts, handling bill collection, and laundry cleaning. The life experiences of students that affected the image of the IADL of patients were interaction experiences with others.

[Conclusion] The life experience of students and the interaction experience factors with others, such as "visiting someone's home," "public bathhouses," "conversation with elderly strangers," volunteer activities and interaction with the local community," "taking care of children and the elderly," were all affecting the image held by the student regarding the IADL of patients.

Keywords: Patient, image of IADL, nursing student, life experience